

に明確にしていきたい。と同時に、土器は地域差、時間差を反映する点も事実であり、それは土器構造のどのレベルでの問題となるのかも検討していきたい。こうした作業は当然、現行の型式論あるいは様式論と低触することになるであろう。

(鈴木 敏 昭)

5. <打製石斧> について

打製石斧の諸々の考察にはいる前に一応付記しておきたい点がある。それは、今回の調査において得られた資料総数が欠損品をも含めて総数19点と極めて微量であったという事実である。従って以下で検討される事項の多くには、相当の限界も、またついてまわっていることは否定できない。だが、傾向だけでも指摘し得たならば本稿の役割は完了するものと考え、若干の無理は承知で認めることにした。

それでは、打製石斧についての若干の考えをまとめてみたいと思う。打製石斧は、いったいどのようなにして、そして何に使われたのであろうか。しばしば打製石斧の多量の存在をもって農耕が行われたひとつの証拠とする意見を耳にする。つまり、彼らにとって、打製石斧は鋏なのである。また縄文中期農耕の否定論者は植物質食料の採集、あるいは堅穴住居の構築等の際に使用する土掘り具であるとの見解を披瀝しているようである。だが、打製石斧が土掘り具であるとする点では、両者とも共通しており、問題を複雑にしている。ある意味では、農耕を肯定するか否かという信念が、石器の機能を決定づけているようにさえ見受けられるのである。従って、ここでは農耕の存否に関しては一定の距離を保ち、できるだけ石器そのものを見つめるように努力してみたいと考える。

さて、現状では、打製石斧が土掘り具であるとする意見が大勢を占めている。一見、疑問の余地がないかのごとく考えられているのであるが、果たして如何であろう。打製石斧を見て、どうも土を掘る道具としては適さないのではないかと感じるのは筆者だけなのであろうか。中には、大きさ、形状からいって全く不適と思われるものもかなり存在するのである。とりわけ、一方の意見としてある堅穴住居を掘る場合には殆んど不適であろう。なぜなら、ロームのような粘性の強い対象物では石器にこびりついてしまい、掘るにしても相当な困難が予想されるからである。また反面、当遺跡のように粘性は無くとも礫混りの砂利層では、やはり難しいと言わざるをえない。打製石斧が土掘り具として有効なのはサラサラした感じであまり粘性のない土を対象とした場合ぐらいであろう。しかし、打製石斧よりもさらに有効な道具は他になかったのだろうか。今日残存していないとは言え、木もしくは竹の掘り棒を想定することは困難であろうか。そのような考えを裏付ける実験データが公表されているので少し触れたい(藤森1970)。それによると打製石斧を柄につけて掘る場合と、棒で掘る場合では、後者は前者の半分以下の労力ですむという(ただし、土の掻き出しは手で行った場合である)。貴重な事実の集積であり、こうした観察は素直に受け入れておきたい。

次に名称の起こりである伐採具としての可能性について検討してみたい。この点に関しても藤森氏による実験データ(藤森1970)が参考になろう。氏らは、大形で、刃が厚く、頑丈で幅広の打製石斧を使用しており、それによると直径10cmもある栗の立木でさえも5分で切断したという。つま

石器番号	出土位置	石 器 名	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	頭部幅 (cm)	胴部幅 (cm)	刃部幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (g)	石 質
1	1号 住居跡	打 製 石 斧	9.5	4.6	4.0	4.1	4.6	1.7	87	硬砂岩
2	1号 住居跡	打 製 石 斧	12.6	4.6	0.9	3.9	4.6	1.6	94	石 墨 片 岩
3	1号 住居跡	打 製 石 斧	6.2	3.1	1.7	3.1	—	1.0	21	頁 岩
4	13号 土 壙	打 製 石 斧	8.5	5.4	3.1	4.3	5.4	2.1	91	硬砂岩
5	14号 土 壙	打 製 石 斧	11.9	5.1	2.8	3.2	5.1	2.1	146	石 墨 片 岩
6	15号 土 壙	礫 器	16.3	10.9	—	—	—	5.4	1082	硬砂岩
7	15号 土 壙	敲 石	21.1	13.2	—	—	—	4.0	—	閃緑岩
8	19号 土 壙	打 製 石 斧	8.6	4.6	3.2	4.3	4.6	1.7	72	頁 岩
9	19号 土 壙	剥 片	6.4	4.3	—	—	—	1.0	26.1	ホルン フェルス
10	1-Cグリッド	打 製 石 斧	10.2	5.2	4.9	4.6	5.2	1.6	117	頁 岩
11	1-Cグリッド	使用痕のある剥片	7.5	6.0	—	—	—	3.5	135	チャート
12	1-Eグリッド	打 製 石 斧	9.3	5.7	5.3	5.7	—	2.4	171	ホルン フェルス
13	2-Dグリッド	打 製 石 斧	9.9	4.7	3.5	3.9	4.7	2.6	151	石 墨 片 岩
14	2-Eグリッド	打 製 石 斧	8.9	4.8	3.0	4.2	4.8	1.8	113	頁 岩
15	3-Dグリッド	打 製 石 斧	9.2	5.7	5.6	4.8	5.7	2.2	137	閃緑岩
16	4-Cグリッド	打 製 石 斧	7.7	4.9	2.6	3.7	4.9	1.4	49	頁 岩
17	4-Cグリッド	打 製 石 斧	9.0	9.2	8.1	4.8	9.2	1.8	178	硬砂岩
18	4-Cグリッド	打 製 石 斧	11.1	6.2	5.3	4.8	6.2	1.9	160	硬砂岩
19	4-Cグリッド	打 製 石 斧	16.8	9.4	8.4	5.3	9.4	3.7	521	硬砂岩
20	4-Cグリッド	打 製 石 斧	10.4	5.6	4.5	4.6	5.6	2.9	173	ホルン フェルス
21	4-Cグリッド	打 製 石 斧	5.2	7.3	—	—	7.3	2.9	88	硬砂岩
22	1号 住居跡	石 鏃	2.2	1.8	—	—	—	0.6	1.9	チャート
23	13号 土 壙	剥 片	2.9	2.8	—	—	—	0.7	3.0	黒耀石
24	15号 土 壙	石 核	2.8	2.1	—	—	—	1.2	5.9	チャート
25	3-Aグリッド	剥 片	5.1	3.0	—	—	—	2.1	10.4	頁 岩
26	3-Aグリッド	剥 片	2.9	3.7	—	—	—	1.3	14.9	頁 岩
27	4-Cグリッド	剥 片	1.5	0.9	—	—	—	0.3	0.25	黒耀石
28	4-Cグリッド	剥 片	1.6	1.6	—	—	—	0.5	0.9	黒耀石
29	4-Cグリッド	剥 片	2.8	1.7	—	—	—	0.9	2.4	黒耀石
30	4-Cグリッド	剥 片	3.6	2.6	—	—	—	0.9	6.5	チャート
31	4-Cグリッド	剥 片	5.1	4.1	—	—	—	1.6	28.0	頁 岩
32	4-Cグリッド	剥 片	4.9	2.8	—	—	—	1.8	20.5	チャート
33	調 査 区 外	使用痕のある剥片	2.9	3.9	—	—	—	2.1	18.8	黒耀石
34	調 査 区 外	打 製 石 斧	9.5	4.7	3.9	4.7	4.7	2.0	119	硬砂岩
35	調 査 区 外	打 製 石 斧	10.0	4.8	3.7	4.0	4.8	1.8	115	硬砂岩
36	調 査 区 外	敲 石	11.0	7.9	—	—	—	4.2	523	閃緑岩

第3表 石器計測表

自然面 \ 形態	I 類		II 類				III 類		計
	a	b	a	b	c	d	a	b	
片面全部			2	1		2	3	1	9
片面 $\frac{1}{2}$	1	2							3
片面 $\frac{1}{3}$	2				1				3
片面一部		1							1
両面にわたる								1	1
自然面無		1						1	2
計	3	4	2	1	1	2	3	3	19

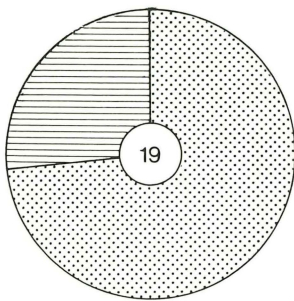
第4表 形態と自然面

り、木を切ることは可能なのである。だが、一般的な打製石斧についてまで普遍化することは難しいのではなかろうか。せいぜい枝をおろす程度のことまでであろう。それとて、現実には、使用痕の見れば明らかなように、伐採具として用いられた形跡を捜しだすことは難かしい。やはり、刃部の磨耗等は土との接触を考える方がいいのではなかろうか。

ここで、打製石斧の用途に関する一定の見通しを得る為に、もう少し使用痕について見ておきたいと思う。第1に全面に同じようにつく例はほとんど無い。第2に片面の下半部、とくに刃部に近い部分に多く残される。第3に刃部に向かって斜めに偏ってつく例が多い。簡単にまとめれば以上の3点に要約できよう。また、自然面を片面に残す例が圧倒的に多い点は当遺跡でもその例外ではなかった。つまり、原石の彎曲がそのまま残されているのである。その面にむしろ使用痕跡は多く見受けられ、そうした原石の彎曲を保存するような意識的行為が加えられたのであると推察される。つまり、自然面を残すということは用途と何らかの関連性を有する行為であったと評価されるのである。我々はここで、打製石斧の用途に関して、除草具としての可能性を打製石鋏論に対するアンチテーゼとして、ささやかに提起しておこうと思う(註1)。勿論、打製石斧には各種の大きさ、形状があり、全てについてあてはまるかどうかは今後の問題であることも肝に銘じておきたい。

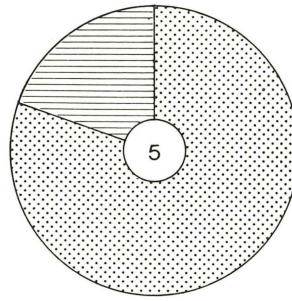
さて、除草具としては、柄をつけた場合、手で直接持って使用する場合の両者が考えられるが、一概に断定し難い。両側縁に顕著に見られる調整等も、柄の装着の為ばかりとは考えられない節もある。中には手になじみ易い形のものも多く存在するのである。除草具＝鎌という現代的な連想が働くが、草を除くのが目的である以上直刃を有する必要性は薄く、むしろ、抜根に對し強い形態を有する方が優先すると考えられる。こうして再び打製石斧を眺め直してみると、除草具としての形状を充分に具えていることが認識される。山野での雑草類の繁茂、成長は著しいものがある。集落自体も油断をすれば、たちまち雑草におおわれるであろうことは想像に難くない。大量の除草具は常に要求されていたのである(註2)。

ところで、小林公明・武藤雄六氏らを中心に打製石器の分析・見直し作業が継続、実践されている(小林1977、武藤・小林1978)。氏らの作業は、従来安易に眺めていた石器を農作業の各種段階に即応する農耕具として再評価しようとするものであり、定説を盲信する人々に対する警鐘としても注目されてよい。その中で小林氏は、打製石器のあるものを草取鎌として分類している。すなわち



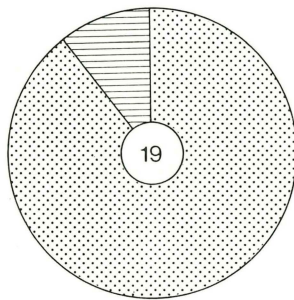
完形品と欠損品の割合

完形品
欠損品



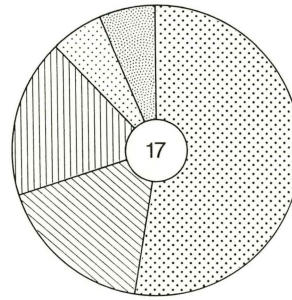
欠損部位の割合

刃部欠損
頭部欠損



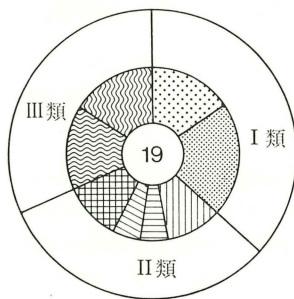
自然面の有無

自然面有
自然面無



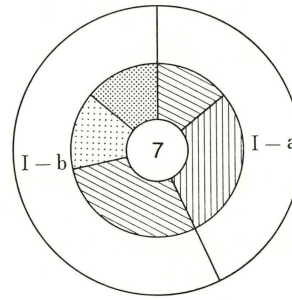
自然面の残存率

片面全部
片面 $\frac{1}{2}$
片面 $\frac{1}{3}$
片面一部
両面にわたる



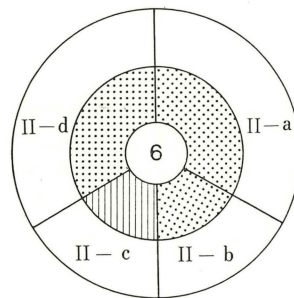
各形態の割合

I - a
I - b
II - a
II - b
II - c
II - d
III - a
III - b



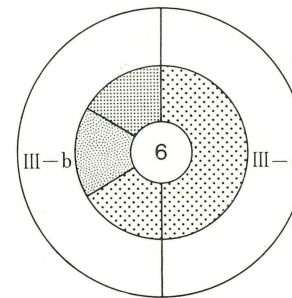
I類の自然面の残存率

片面 $\frac{1}{2}$
片面 $\frac{1}{3}$
片面一部
自然面無



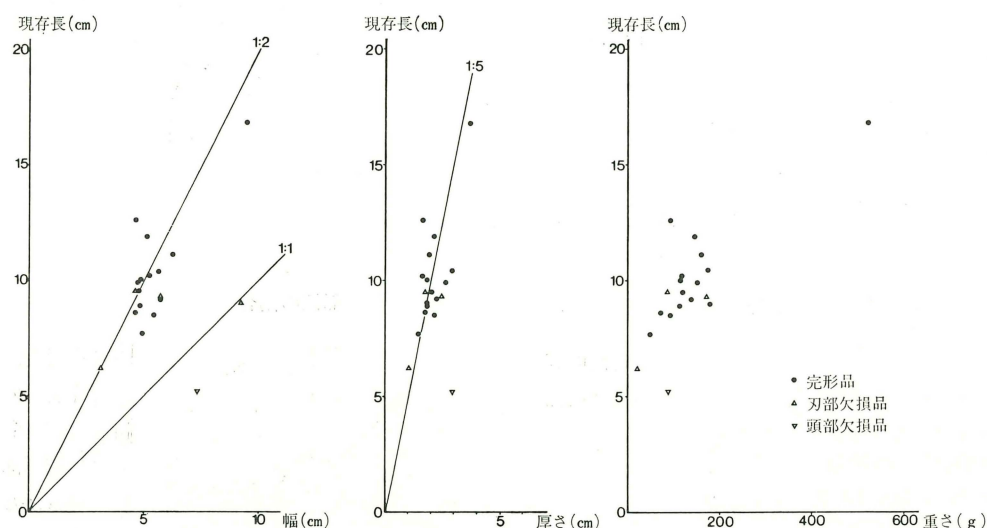
II類の自然面の残存率

片面全部
片面 $\frac{1}{2}$



III類の自然面の残存率

片面全部
両面にわたる
自然面無



第34図 打製石斧形状相関図

氏は、ほぼ直刃を有する従来の縦型石匙をこれにあてたのである。個別石器についての批判云々は本稿の意図ではなく略すが、小林氏等の仕事も体系的なものである以上、もうしばらく静観したいと思う。いずれ検討の機会が訪れればと願うものである。

(松村 和男)

註1 台湾の東南洋上の紅頭嶼ヤミ族は焼畑農業を行うが、その際に、日本の打製石斧に似た石器を1938年ごろまで使用していたということである。彼らが使っていた打製石斧はピーラスまたはチチヴチブと呼ばれ、日本の縄文時代の分銅形のものに極めてよく似ている。それは柄をつけずに手で握り、畑地を開墾する際に草（とくに萱など）の根を打ち切り、取り除くのに用いられていたという。珪質砂岩製の方角状片刃の打製石斧は柄をつけ、手斧のようにして、これもまた開墾の際に萱の根を除くのに用いられていたという。そして、実際に、焼畑農耕に使っていたのカカリと呼ばれる掘棒である。きれいな彫刻を施したものはババゴトと呼ばれ、祭祀のときに使用する水芋の収穫に用いられるそうである。また、他の東南アジアやオセアニアなどの熱帯地域の場合でも掘棒は種を蒔いたり、植物を植えたりする穴を土地にあけるためなどに用いられているようである。

註2 焼畑農耕の移動の要因は一般的説明によるととくに地力が衰えた為だと言われるが、最も焼畑の継続を困難にする原因は、雑草の繁茂である。焼畑における最も重要で、労力のかかる仕事は除草なのである。九州山地では、6月中旬から7月中旬に「一番草」、8月上旬から9月上旬に「二番草」といって年2回除草を行うが、二回目の方はとくに手間がかかるそうである。それでも、畑地は毎年約10～20%雑草により狭められ、4年目の耕地で1年目の半分以下になってしまうそうである。これほど雑草の力というものには強いものがある。仮りに、縄文時代に焼畑農耕があったとしても、やはり雑草が最大の敵であったことは疑いないであろう。